

大分の在来作物とみどり戦略

～充実した土づくりで伝え継ぐ～

【在来とうもろこし「もちとうきび」】

とうもろこしは、米、小麦と並ぶ世界の主要穀物ですが、主な生産国である米国、中国及びブラジルで世界生産量の67%を占めており、日本も多くを輸入に頼っているという現状です。

そんな中、大分工業高等専門学校の 森田 昌孝准教授は、江戸時代に大分県内で栽培されていたと言われる貴重な在来とうもろこし「もちとうきび」の、保護と生産拡大に取り組んでいます。

【丁寧な採種】

竹田市内の福祉サービス施設の協力で、丁寧な採種作業が行われています。除草剤を使わない圃場で栽培され、収穫や皮むきなどの一連の作業は手作業で行われています。

採種された種子を使って、豊後大野市や大分市の農業法人の圃場など（約2ha）で、「もちとうきび」の販売に向けた栽培が行われています。

【黒系と白系の品種】

この取組の「もちとうきび」には、黒系と白系の2品種があります。

在来品種のため、収量や糖度はそれほど高くないものの、黒系は加工に適しており、お茶、ポン菓子のほか、クラフトビールの原料としても使われています。白系は生食に適しており、独特の食感を楽しむことができます。

【今後に向けて】

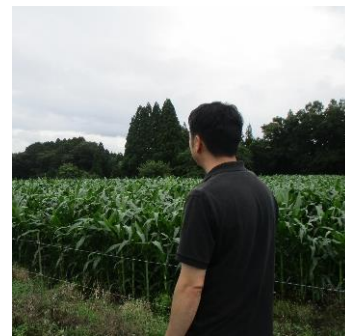
森田准教授は、牛ふん堆肥の効果検証を行い、充実した土づくりによる、化学肥料に頼り過ぎない栽培方法の確立を目指しています。

消費者からの評価が高いお茶の増産をはじめ、「とうきびめし」やスプラウトの試作など、関係者が同じ方向を向いて、大分の貴重な在来作物である「もちとうきび」生産拡大の試みが進められています。

さらに、本年3月には森田准教授が会長となって「おおいた在来作物研究会」が発足しました。既に多くの会員が参加し、保護と生産拡大に向けた在来作物の種類も増え始め、期待が高まっています。



[もちとうきび（左：黒系、右：白系）]



[生産圃場と森田准教授]



[採種圃場]



[加工品（左：お茶、右：クラフトビール）]



[堆肥の効果検証]



[小学校での栽培学習]

【連絡先：おおいた在来作物研究会 : Instagram (@oitaseed) 】

令和7年7月現在